
ゆ〜あんどA I

ニュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆるあんどAI

【Nコード】

N6158I

【作者名】

ニユー

【あらすじ】

ノリに笑いに突っ込みにフラッガーな主人公のとある学園生活。

夢で思い出（前書き）

ふと思い付いたので書いてみました。
初投稿ですのでよろしく願いたします。

夢で思い出

久しぶりに昔の夢を見た。

白い世界で、顔のよく見えない両親が俺の前に二人してしゃがみこんで、言う。

『春人』

『春人は、お父さんとお母さん。どっちと一緒に暮らしたい？』

二人とも俺の手を別々に握りながら、そんなひどい事を選ばせる。

その時のことは、もうよく覚えていない。

世界が白いのもそのせいだと思った。

しかし、この後の俺自身の行動はすぐに思い出す。

俺の記憶が正しければ、その日が、生まれて初めて、いやだいやだと駄々をこねながら大泣きしたはずだ。

そうこれが、俺が一番最初に我が儘を言った思い出——。

夢で思い出（後書き）

一応ぎやるげっぱいものを目指しているつもりです。

学校の快談

「今日も今日とて、学生、学生つと」

通学カバンを片手に、学舎への道を歩く。

咲き誇るさくら並木が風にゆられ花びらが舞い落ちるのを眺めながら。

…へっきし！

春夏用の制服はまだ早かったかもしれない。

「おはよう春人。風でも引いた？」

「2秒前に通過した曲がり角から自然に合流したこの男は「鼎 未来」

この、聞いただけでは性別が解りにくい名前の通り。
ユニセックスフェイスで中肉中背のさらさらヘア！。身長は160
センチの特徴は四角いメガネ。

しかして、その実態はウルトラオタツキーな友人その1だ」

「ねえ春人。その評価はちょっとあんまりじゃないかな」

「あんたねえ。朝っぱらから何を1人でぶつぶつ言ってるのキモいんだけど」

はい。朝キモ頂きました。

「そして、この俺の右隣に現れた彼女の名前は
「桃乃木 莓」なんともフルーティーですいーなシヨーチ
ゃん（シヨートカットの略）。

そして、「名は体を表す」という言葉の体言者。

通常、桃といえば尻だが↑（下品）彼女は身体は三文字で表される。
そう水・蜜・桃！

つまりはおっぱいだ！

上から推定92、76、85の胸元は正に圧巻。

学制服を盛り上げるそのおっぱい。

きつと身長でシャツを選んだならばおへそが見えてしまつに違いな
い！

去年はクラスが違ったが、今年同じであるならば、
是非！体育の時間に一回り小さな体操服を着た彼女のおっぱいを横
から鑑賞した

ズドム＝

「ゴガツ！？」

「何を朝っぱらから、通学路で人の胸ムネ言つてんのよこの変態＝」

一体どこで覚えたのか、掌低で俺の鳩尾にありえない音を響かせな
がら左腕で胸を隠しつつ顔を赤くしながら怒る莓。

「ぐうう。ば、馬鹿な俺のモノローグに干渉してくるとはきさまエ
スパーか？」

唐突なクリティカルに悶絶しながら俺は疑問を投げ掛ける。

…あ、リバーズしてしまいそう。

「春人の言っているモノローグっていうのは何だかわからないけどさつきから声に出して喋っちゃってるよ」

周囲の視線を気にしてか、それとも急な暴力事件に軽く引いたのか、「アハハ」なんて笑いながら答えをよこす未来。

「全くこのスケベは。ほら、まだ階段があるんだから早くしないと遅刻するよ」

「そうだな。まだそれがあつたのか」

痛みを堪えて何とか立ち上がり痛む鳩尾を押さえながら山門をくぐると目の前に階段がそびえたっていた。

言葉的にはおかしいが、

しかし、それ以外に表すことの出来ない校舎を見せないこの階段。

軽く千段を超えるそれは、「鍛練の階段」略して「練段」ともいわれ、我が校の運動部が最強の名を冠している原因であるとともに、遅刻者に絶望を抱かせる。

学校側の理由としては、帰宅部の生徒にも、体力を付けてほしいから。

などと言っているが、ただたんに山の上の土地が安かったからに違いないと俺は睨んでいる。

しかし、階段の両脇にはエスカレーターが有るため、それ程無茶には感じないかもしれないが、このエスカレーター！

途中で乗降出来ない一本釣り仕様な上に、とてつもなく遅い。

まだ、社会を知らない学生たちが、朝の駅構内の法則など気に掛ける筈もなく、下手をするとエスカレーターに乗ったまま、遅刻が確定してしまう恐ろしい罠なのである。

正直歩きの方が早い。

「がっしんどい。こんなもの消えてなくなればいいのに」

「それは無理だと思うよ」

「だったら春人も、自転車通学にすればいいじゃない」

「無茶いうなよ。俺にあんな真似出来るわけ無いだろうが」

一応、自転車通学も許可されてはいるが、山の頂上にある学校への道は自然と螺旋になる。

アスファルトで綺麗に整備はされているが、考えても見る、一つの山を自転車に無理のない傾斜で登ってゆくんぞぞ！？
一体どれだけ時間が掛かると思っのか。

しかし、それは時間が掛かるだけであって無茶ではない。

では、何が無茶なのかと言うと答えは階段とエスカレーターの間にある4人は横並びで通れるであろう道にある。

そんなことを考えながら2/3ほど階段を上り切ったときそれは現れた。

「どーいた、どいたー跳ね飛ばし御免だよーキャホーイ」

（ ） /

「来た」

「相変わらず凄いわね」

「少し急がないとダメかなあ」

朝からテンション爆発した声が下から聞こえる。

その張本人たる彼女はまるで平地に行くかのように自転車で登山してくる。

そう。毎の言う自転車通学とは、アスファルトではなく硬質なゴムで整備された斜面45度のこの道を自転車で走るということなのだ。そして、朝の予鈴が鳴る15分前にやってくる彼女を先頭としたこの集団はこの学校の一つの風物詩であり、時報代わりでもあった。

この道は最強の自転車乗り（Bicycleライダー）を決定するサイクリンググロート

（自転車王の道↑誤字にあらず）

36段ギア付のマウンテンバイクを乗りこなし、今代の王たる彼女を筆頭に競輪部自転車研究会。

サイクリング同好会などが次々にこの坂…

いや、斜面を上がってくる。

「以外と春人なら出来ると思うんだけどな」

「うんうん」

少しペースをあげて階段を上りながらそんな事を言う二人。

「テキトーなことをいうな意地でもするか」

こいつらは俺に何を期待しているのか。

「それにしてもこの階段。今は慣れたけど結構危ないわよね」

「そうだね」

「馴れるまでが怖いよな」

因みにこの階段。

手摺りや間に石畳等は一切無い。

さらに階段自体が微妙に崩れているというスタントマンも真っ青の石段だ。

「せめて、足下だけでもしっかり造ってくれないかなあ」

なぜ魔が差したのか

言いながら足下を見る苺を見てつい口が滑ってしまった。

「何を言っただ？元々それ（胸）が邪魔で足下なんか見えないくせに」

「この馬鹿ー！！」

ドグシャ

「がはっ」

聞くが早いか的確に俺の真芯をとらえて蹴撃にはしる苺。

先程の「この階段危ない」発言は一体何だったのか。

綺麗に体を横にして吹っ飛ぶ俺。

本当になぜ突っ込んでしまったのか。

これから起こる階段落ちを覚悟するが、気付く。

今俺が滞空している所は自転車王の道であるということに――

そして、悲劇は起きた。

この坂の角度は洒落にならない。

一度動きを止めてしまえば手で押して進む事すら困難なのだ。

俺の所為でコップを流れ落ちる水滴の様に規模を拡大しながら滑り落ちていってしまうのか。

――と思っただけどネ

現実をもっと凄かった。

「おおっと危ないよ引き捨て御免だー」

爆走する王とぶつかった瞬間

CRAAASHU

という擬音とともに手足を正に曲げ、まるで風車の様に回りながら吹っ飛ぶ俺

…（´・ω・｀）？

「なあにいいいい！」

それはきれいなアーチを描き反対側を走っていた競輪部の自転車の前へ落ちてゆく。

「おら、どいたどいたー」

DOOON

「がっはー！」

俺を上手く拾いやがった馬鹿が噴火系の擬音でもう一度反対側へ飛ばされて、

「繋いでやるぜえ」

BOCAAAAAAN

「どっはー！」

サッカーと勘違いしているのでは？とイミフ（意味不明）なことを言いながらアメコミ張りの横文字で俺を叩き上げ

「フィニッシュだ」

当然のように息を合わせたアフオが俺を校門に飛び込ませようとわざわざ角度を調整してきやがる。

CHIE

「なっ！？かすりだとお」

そして、俺の正飛びをの力の流れをうまく利用したそいつにまるでバスケのアリウープの様に真っ直ぐに着地点を修正させられた俺は空中平泳ぎも虚しく

グシャ

と地面に叩きつけられるのであった。

「グ、ググ馬鹿な、一体。いつ俺にギャグ補正など…」

あまりの衝撃に何とか起き上がろうと腕を震わせながら胸を持ち上げる。

そんな俺を見下ろしながら

「さすが、春人だね」

どうやって開いたのか、俺のステータスウィンドウのスキル欄にギャグ補正
などと書き込む眼鏡に

「急がないと遅刻するからね」

と、心配のしの字も無い莓。

言いたいことが終わったのか、スタスタと俺を置いてゆく二人組。

…なんて愛がない奴らなんだ。

ああ、そう言えば、自己紹介がまだだった。

今だに校門のど真ん中で、潰れているのが語り手たる俺、春牧春人。

フツメン 男だ。

教室の日常

ガラッ

「あゝ酷い目にあつた」

朝っぱらから起きたヘビーな出来事に凹みながら、一年間馴れ親しんだ教室のドアをくぐる。

確か、この後軽いHRをやって体育館に移動だったはず。

「あ、遅かったね春人。もう少しで遅刻だったよ」

ドアを開けた俺に気付いて未来が近寄って来るのだが、

その 何でこんなに遅いの？ 的な言い方にイラッときた俺は、すぐさまソイツの鼻を思い切り摘むのだった。

「ひたいよはるふぉ」

「遅かったね？だと、どの口が言ってたんだゴラァ」

「そ、そこは鼻だよぉ」

徐々に涙目になりながら手を外そうと藻掻く未来。

ふん！そんな細腕で俺様のN o s e クローは、外せんわ！

「しかも、勝手に人のステータスウィンドウに、ギャグ補正なんて書き込みやがって、今すぐ消しやがれ！」

最後の”れ”の言葉と同時に、思い切り鼻を引っ張って解放する。

「うう、いたいよう」

鼻を赤くして、軽く涙目な未来。

ふん。

思い知ったか。友人をスタスタ置いて行く薄人があ

（薄情な人の略）

良い気味だ。

「まだ鼻の赤みがたりんならもつとやってやろうか」

「うわー、かんべんしてよー」

ジリジリと両手を上に伸ばしながらにじりよる俺にジワジワと教室の角に追いやられてゆく未来。

「さあ、始業式に赤鼻のトナカイとして出席しなくては、この妙な補正をさつさと消してもらおうか」

あはれ、未来は絶体絶命の危機に陥った――

のかと思いきや。

「あ、それは無理だから」

今までの追い詰められ感が嘘のように素に戻るメガネ

「無理？」

「うん。春人のギャグ補正は、フリースロットのセレクトスキル

じゃなくて、基礎ステータスへの追加だから」

「は？」

「ほら、よくあるでしょ。取得経験値upとか、ゴールド入手5%upとか」

「ああ」

「そつちじゃなくて、a g uとかn i tとかの方に追加されてるから。例えるなら物語の中盤から魔法が使えるようになった主人公に新しく魔力欄が追加される。みたいな？」

「と言うと？」

「だから、それを消すには初期値へ戻すしかないってこと」

「つまり？」

「一回死ねば、消えるんじゃないかな」

「…死!？」

所で、実は今、担任が教壇の前にいるのだが、俺と未来のある意味いつもど通りのやり取りは、新学期初日という忙しい時にやっていたせいもあってか、クラスメイトは、全員スルー。

担任すら咎めることは無く、全校集会の予鈴でようやく我に返った二人はダッシュで体育館へ向かうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6158i/>

ゆ～あんどA I

2010年10月21日20時53分発行